

さぎそう

姫路獨協大学附属図書館報

No.31

2006.7

目 次

気候馴化と文化的適応	1	学生のすすめる一冊の本	5
大学における図書館の役割	3	図書館日誌	8



NEWSLETTER OF H.D.U. LIBRARY

気候馴化と文化的適応

医療保健学部長 堀 清 記



テレビの気象予報を聞いてみると、今日の最高気温は31℃で暑くなるでしょうなどと云っている。このように環境の温熱的性状は、通常環境温度をもつて表わされている。しかし

環境の温熱的性状は、空気の湿度、放射(輻射)熱、気流、気圧などによつても変化する。31℃で、無風、太陽の直射下では暑いが、少し風が吹いている木陰に居れば涼しい。ヒトは快適に感じる温熱環境下では、安静状態での代謝(熱産生)量(産熱量)が最も少ない。環境温が少し変化すると、皮膚血管の伸縮による皮膚温の変化に伴い放熱量が変えられる。その結果体温はほとんど変わらず代謝量は一定に保たれる。この温域は、代謝不関域、血管調節域あるいは中和温域などと呼ばれている。しかしこの温域は着衣量が変わると変化する。着衣は、中和温域の温度を下げかつ温度幅を増加させる。

クールビズは着衣量を減らして、夏での室内温の中程温域を高くして、冷房に使われるエネルギー

量を減らして、CO₂の排泄量を減少させる運動である。快適環境温から環境温を下げていくと、涼環境、やがて寒冷環境となる。環境温を上げて行くと暖環境、やがて暑熱環境となる。環境温を下げてゆき、代謝量が増加する環境温が下臨界温でそれ以下の環境温域を化学調節域という。環境温を上げてゆき、発汗が起こる環境温を上臨界温と呼び、それ以上の温域を物理調節域あるいは蒸発調節域などと云っている。

ところが、やっかいなのはこの下臨界温、上臨界温が一定でないことがある。年令や性別、体型や体構成、基礎代謝量によって変化する。例えば同一人でも寒さに馴れると、下臨界温は低くなり暑さに馴れると発汗反応は変化する。通常、衣服と被服は同じ意味で用いられている。しかし、上着、下着、肌着などを被服、人の着ているもの全体を衣服と区別し、衣服量を着衣量という。我々の皮膚は空気と接している部分と衣服に被われている部分がある。無風のとき皮膚に接している空気は約6mm程度は動きにくくこれを限界層と呼んでいる。皮膚に接している空気は暖められ対流が起こる。風が吹くと限界層は減少し放熱量が増

加する。しかし気温が35°C以上になると皮膚温は空気温より低くなり熱は空気より皮膚を介して体内に入る。放熱手段は皮膚及び呼吸気からの水の蒸発のみとなる。被服下の温熱環境を微気候という。これは被服が異なると変化する。

例えば無風で室内温が21°C、平均皮膚温が33°Cとすると、着衣と空気を含めた断熱度は0.32°C/kcal/m²/hrである。無風での空気の断熱度は0.14°C/kcal/m²/hrなので、着衣の断熱度は0.18°C/kcal/m²/hrとなり、これを1クローと云う。環境温が快適環境より低くなると着衣のクロー値は増加し、高くなると着衣のクロー値は減少する。運動中の着衣のクロー値は減少するがクロー値と運動強度の間には負の直線関係がある。

寒冷気候または暑熱気候下での生活を快適にするためヒトは、着衣量を変化させ、住居をつくり、室内温を冷暖房機により快適温熱環境に近づけている。これを文化的適応という。一方ヒトは環境の温熱的変化に対して、生理的機能を変化させて体温調節能力を高めることができる。これを適応能という。寒冷環境への頻回の曝露により、皮膚血管の収縮の程度が強くなり、放熱量が減少して、中枢温の低下が少なくなる。甲状腺ホルモンの分泌増加により、代謝量が増加する。ふるえ産熱量が減少し、非ふるえ産熱量が増加する。

寒冷ふるえは皮膚表面に接する空気を攪拌し放熱量が増加するので、非ふるえ産熱量に比べると体温低下阻止作用が少ない。寒冷曝露時の生理的反応の変化が体温維持により効果的になることを寒冷馴化(順化)という。暑熱環境への頻回の曝露は体温上昇を抑える生理的反応の能力を高める。これを暑熱馴化と呼ぶ。暑熱馴化時には発汗反応の促進、皮膚血流量の増加、血液量の増加、代謝量の減少などが起こる。安静にしているヒトが急に暑熱環境に曝露されると、すぐには発汗が起らない。発汗の起こるまでの時間を発汗潜時とい。暑熱馴化による発汗反応の変化は、発汗潜時の短縮、発汗量の増加、汗の食塩濃度の低下である。汗量の増加に伴って水の蒸発による放熱量が増加する。汗の食塩濃度の低下は、汗の浸透圧濃度を下げて、水の蒸発

量を増加させる。代謝量の減少も体温上昇を遅らせる。快適環境下で安静にしているヒトでは代謝量と放熱量は等しく体温は一定に保たれる。安静時の代謝量は基礎代謝量の約120%である。

気温の上昇は基礎代謝量を減少させる。兵庫医大での私の前任の吉村寿人教授は昭和58年に「日本人の熱帯馴化:気候風土への人の適応(日本人の生活と適応性シリーズ)¹」(社会保険新報社)を編集され、私も日本人の熱帯適応というタイトルで執筆した。この本に、沖縄在住者を含む日本人、日本在住のカナダ人、タイ人、インド人、韓国人などの青年男子の基礎代謝量と月平均気温との関係図が示してある。快適気候での基礎代謝量は、37~38kcal/m²/hrであるが、月平均気温が8°C~28°Cの範囲では、月平均気温が10°C上昇すると2kcal/m²/hr程度減少し、月平均気温と基礎代謝量との関係はほぼ直線である。

当時は、測定が行われたこれらの国での一般住民の家屋の空調設備の普及率は低かった。現在では、空調の完備した室内で長時間生活しているヒトが増加している。基礎代謝量の変化は月平均気温よりは室内温度を含めた実際に生活しているヒトの環境温と密接に関連しているものと推定される。おそらく現代人の基礎代謝量と月平均気温、あるいは季節変動との関連はより少なくなっていると思われる。

現代の日本人の冬における寒冷馴化、夏における暑熱馴化の程度は昭和50年代の日本人のそれらと比べると充分ではない。例えば、現代の日本人では、夏の冷房のかけすぎで冷房病になるヒトすらある。その結果、現代の日本人は夏の炎天下で運動をすると日射病にかかりやすいヒトが増加している。同様に冬に暖房のよく効いた部屋で生活しているヒトが戸外に出ると大きなストレスを体内に生じることになる。室温を過度に快適温熱環境に調節すると、寒冷馴化あるいは暑熱馴化の形成が阻害され、戸外での寒冷刺激や暑熱刺激に充分対応できる体温調節能力を低下させる。室内の空調はほどほどにしておくことが望ましい。

(ほり せいき)

1 2階開架図書室 498.41//Y0

大学における図書館の役割

法学部 講師 金 丸 義 衡



1. はじめに

先日、ようやく「ダ・ヴィンチ・コード¹」を日本語版で読んだ。この小説の世界では、英語に加えていくつかのヨーロッパの言語が効果的に組み合わされることで、同書の中心ともい

うべき謎解きが組み立てられている。そのため、かつて話題になった「薔薇の名前²」と同様に、日本語を母国語とする私たちからすると、アナグラムに代表されるこのような言葉遊び³の楽しみはどうしても半減してしまう。こういう小説を読むと、コプト語とまではいわないまでも、英語のみならず、いくつかのヨーロッパ圏の言語についても一般教養として勉強しておく必要性を痛感させられる。

そして、同書の冒頭に「この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている」とわざわざ断り書きがしてあるように、十分にその内容を楽しむためにはやはりヨーロッパ史とキリスト教史についての一定の知識がなければならないのであろう。残念ながら私自身は正確な知識を持ち合わせていないが、こういったときに役立つのが「本」である。当然のことながら、現在生きている人類のすべては、キリストの生きていた時代を直接経験しているわけではなく、また、現代のようにビデオや写真といった資料もないのであるから、当時のことは残された文字情報である「本」から想像していくしかない。

古くは古代エジプトのパピルスに始まり、日本でも木簡を経て現在の紙に至るまで、洋の東西を問わず数多くの「本」が残されてきた。現代に生きる私たちは、これらを通して、過去から現在にかけて起きた事象、そして著者の考え方を追体験することができるるのである。

2. 研究と「本」

文系理系を問わず、新たな問題を提起し、解決の糸口を見つけるという学問の発展には、発想力というまさしく個人のオリジナリティが發揮されなければならないけれども、その前提として、先行研究の分析という段階を経ることが不可欠である。着想時点においては全く新しい観点に思われたとしても、同様の問題提起が既に行なわれており、場合によっては既に克服された問題意識であることも少なくない。先行研究の分析というのは、これまでどのような問題が検討されてきたのかを明らかにし、残された問題点の解決を提示し、場合によっては、それらをふまえた新たな問題提起を行なうための準備作業である。いうなれば、新たな研究というのは、先達の積み重ねてきた業績に、もう一つだけ新たな知恵を積み重ねる作業ということもできよう。

このように先行研究を分析するに際して、最も簡単な手段は「本」を入手することである。時間的および空間的隔たりを無視して、「本」からは古今東西あらゆる事象についての知識を得ることができる。したがって、学問において、最も基礎

1 Dan Brown著／越前敏弥訳「ダ・ヴィンチ・コード(上・下)」2004年・角川書店 2階開架図書室 933//BR//1・2

2 Umberto Eco著／川島英昭訳「薔薇の名前(上・下)」1990年・東京創元社 2階開架図書室 973//EC

3 ハリー・ポッターで有名になったアナグラム、「Tom Marvolo Riddle = I am Lord Voldemort」を覚えている読者の方も多いだろう。

におかれるべき能力というのは、必然的に文献の検索と読解力ということになり、大学での研究および勉強においてはこの能力を身につけることを第一の目標としておかなければならぬ。

3. 図書館の「本」

そのための手段として、大学に用意されているのが図書館である。私自身、図書館を勉強の場所として利用したのは、大学生になってからである。それまでは、新刊雑誌のチェックであるとか、文芸書の貸し出し機関としか考えていなかった。もっとも、大学一回生のときの利用というのも、新聞を読んだり、勝手に勉強をするための自習室としての利用が多かったように記憶している。

本格的に図書館を活用するようになったのは、大学二回生のときからである。漠然とではあるが法律関係の職に就きたいと思うようになり、大学生にとっては比較的高価な部類に入る法律専門書を借りてきては読み進めた。そして三回生のゼミからは、判例検索⁴や文献検索にと大いに役立ってくれた。

大学における図書館というのは、しばしば何万冊の蔵書ということがアナウンスされているように、まさしく知の宝庫である。現在の図書の流通過程においては、初刷のみで販売が終了してしまう書籍も多く、入手の機会を一度逃すと二度と手に入らないこともあります。また、過去に販売された書籍というのは当然のことながら古書店でしか手に入れることができない⁵。しかしながら、大学および研究機関の図書館では、およそ一般的需要のない書籍であっても学問的価値があれば広く受け入れているので、こと専門的な勉強を行なうものにとっ

てこれほどありがたい施設はない。最近は、グーグルやウィキペディアなどインターネットを利用して情報を入手することが可能であるとはいえ、それによって書籍の原典資料の価値が低められるものではない。むしろ、検索で得られた部分的な知識について、論者の体系的な思考過程を理解するための文献研究がよりいっそう求められているといえる。学生諸君にも、自分の勉強、大学での課題など調べることがあるときには、簡便な検索方法を利用するのと同時に、その断片的な知識を有機的に結合するためにも、必ず引用されている原典資料にあたることを強く推奨したい。

4. 結びにかえて

レストランに例えるというのはいさか食傷気味ではあるが、大学全体をレストランとするならば、我々教員や学生は料理人ということになろう。料理人の腕が如何に優れていたとしても、つまり、どれほどすばらしい着想を得たとしても、その素材がしっかりとしたものでなければ、おいしい料理を提供することはできない。数多のスパイスのうちほんの一つが欠けていたとしても、味のバランスが損なわれてしまいかねない。その素材やスパイスを提供するのが大学の図書館であり、そこに集められた「本」は、私たちが利用してはじめて生きてくるのである。既にある素材から着想を得て、また新しい素材を発注することによって、新たな成果を作り上げていくのであり、私たちはこのような相互作用を継続していかなければならない。

最後に、これからも、学びの中心として本学の図書館が機能することを願ってやまない。

(かなまる よしひら)

4 とりわけ法学部生には、積極的に判例を読み進めるとともに、原典資料として「最高裁判所民事(刑事)判例集」(2階学術雑誌コーナー・書庫2判例集(和))を使いこなせるようになってほしい。なお、まだ刊行されていない最近の判例については、最高裁判所のHP(<http://www.courts.go.jp/>)でも検索することができる。

5 たとえば手元にある書籍では、鳩山秀夫「日本債権法(総論)第43版」(1922年・岩波書店)が最も古い法律書である。大学院生時代、古本屋で1冊300円の棚にあるところを偶然発見し、幸運にも入手することができた。なお、本学の図書館書庫1層には、同「日本債権法(総論)増訂改版」(1925年・岩波書店)<324.4//HA>が配架されている。

学生のすすめる一冊の本

外国语学部日本語学科教授 渡邊 志津子

昨年度、私は「出版、文化」についての授業を行った。書物の歴史を、パピルスやロゼッタ石の話から現代にまでつなげた。受講した学生は、読書の好きな人が多く、授業の前後の時間は本の話で盛り上がった。また授業と並行して、それぞれがお気に入りの本を紹介する、いわゆる読書案内のようなこともやってみた。正統的な(?)文学作品から現在話題になっている小説、漫画にいたるまで多様な書物が紹介され、「正統派」の私にはずいぶん参考になった。

ここに紹介するのは、その時「私のすすめる一冊の本」として、学生に書いてもらった文章である。どれも興味深い本であったが、私が4人の文章を選び、学生が編集した。

さて読書しようという時、書店では本の洪水となっていて、選ぶのに四苦八苦することもある。そんな時の一助となれば幸いである。 (わたなべ しづこ)



私は、『愛と死』¹(武者小路実篤著 新潮文庫)を薦めたい。この本は、昭和27年に発行された作品である。私は、この作品で何度も涙した。これは、とても美しい愛の話である。

この作品は、文字通り「愛と死」についての話だ。現代に生まれ、生きている私にとって、昭和時代の恋は新鮮である。言葉遣いも、異性との距離感も今とは違う。

大まかな内容を述べよう。これは、村岡という男とその友達(野々村)の妹、夏子との愛の話である。密かな恋から確かな愛へと成長していく。しかし、二人は村岡の巴里への留学のため、離れ離れになる。当時、巴里へ行くには船で1ヶ月半もかかった。巴里はとても遠い国だったのだ。二人は離れる前に結婚の約束をした。

留学中、その「愛」は沢山の手紙で綴られていき、とても強い絆・愛を育てていった。村岡が日本へ帰ってくる途中も夏子との文通は続き、その内容は「もうすぐ会えるのですね」といった再会を楽しみにする内容ばかりになっていた。そして、村岡が日本へ

帰国する14、5日前に村岡に電報が届いた。それは、夏子が病死したというものだった。それまで楽しみにしていた帰国は全く意味のないものになり、何よりも自分を待っていてくれた夏子を哀れむ気持ちが村岡を絶望させた。毎日届いていた手紙の内容を思い出したり、これから待っているはずだった幸せな日々を思い、全てが崩れてしまったという絶望感に駆られた。村岡は、夏子がいなくなってしまったという淋しさをどうしても紛らわすことができない。しかし、光がなくなってしまったという絶望の中に、忘れていた一つの光を見つけることができた。それは無私の愛を注いでくれる母だった。

そして、村岡が乗っていた船は予定通り日本へ着いた。そこには、夏子の兄(野々村)と村岡の兄が待っていた。再会した三人は泣いた。それは、再会を喜ぶものであり、夏子の死を悲しむものでもあった。

数日後、夏子の墓で村岡と野々村が夏子について話をする。それは、生きている者と死んでしまった者とのことだった。死んだ者は、何もかもから解放される。だから今、夏子は不幸でもないし悲しんでもいない。「死」というものに腹を立てたり、悲しんだりするのは、生きている者の心理であり、死んだ者の心理ではない。だから、夏子は今可哀相ではないのだ。しかし、可哀相だと思う、それは生きた者が思うことなのだ。

夏子の「死」をきっかけに、村岡は「生と死」について考える。愛した者の「死」に直面したからこそ「死」というものを深く考えることができたのだろう。村岡の「死」というものの捉え方を読んでいると、とても感慨深いものがある。「死んだ者は生きている者に大きな力を持ちえるが、生きている者は死んだ者に対してあまりにも無力である」

人は必ず死ぬ。誰かの「死」に直面することもある。そういう時、この本を読んでみてほしい。「死」とは悲しいものである。しかし、仕方のないものだ。愛とは、色んな形をして人の周りに溢れている。それは、母

であり、恋人であり、友でもある。その人たちともいつかは死に別れる時が来るだろう。しかし、その時こそ、この作品の意味を理解できると私は思う。

今、共に生きている「愛する者」を大切にしようと思える作品である。「愛と死」どちらも目に見えないからこそ人は様々な考えを持つ。その様々な考え方の一つとして読んでみるのはいかがだろうか。美しい愛の物語と共に、誰にも必ず訪れる死について考えさせられる作品である。
(村崎愛)



私の薦める本は、『僕の生きる道』²(橋部敦子著 角川書店)である。2003年1月~3月まで放送されていたドラマをノベライズしたものである。

ストーリーを簡単に述べることにする。主人公の秀雄は有名進学校の生物の教師であり2年G組の担任でもある。日本の受験戦争の現状をそのままこの2年G組に集約したと言えよう。受験に生物が必要のない生徒たちは秀雄の話に少しも耳を傾けない。だが秀雄は淡々と授業を進めていく。このような1日を繰り返すばかりであった。そんなある日、秀雄は健康診断で再検査と言われ、検査を受けると、悪性のガンが見つかり余命1年と宣告された。その時から秀雄は自暴自棄に陥る。「どうせ、あと一年だから…と。」

しかし、そんな秀雄を立ち直らせたのは同僚のみどりであった。秀雄の病気のこと、余命のことを受け入れた上で、後に二人は結婚をする。みどりは、余命一年という事実を知ってから、秀雄とたくさんの思い出を作ろうとあらゆる行動をする。その中でも、2年G組を合唱コンクールに出場させるという難題を秀雄に提案する。秀雄も了承し、練習を始めことになったが、最初は一人も集まらない。しかし、病気の事実を生徒たちが知ってしまい、少しずつ秀雄に協力するようになる。コンクール予選当日、指揮を終えた秀雄は舞台上で倒れ、そのまま病院に運ばれた。2年G組は予選を通過し決勝進出を果たした。客席には、先ほど病院に運ばれ外出禁止となった秀雄とみどりの姿があった。そして、生徒の歌声を聞きながら秀雄は息をひきとる。

私自身、改めて読み返してみて「今を大切に生きること」を思い直した。「死」は誰にも平等に訪れる。今日は元気でも明日には死んでいるかもしれない。

少し言葉が悪いかもしれないが本当のことである。私自身母を3年前に亡くした。2003年1月に入院し3月に亡くなった。ちょうどこのドラマが始まって終わるまで闘病生活を送っていた。ドラマと事実が同時進行で進んでいた感じがした。母はまだ50歳だった。ついこの間まで元気で明るい母だったのに、今自分の目の前にいるのは、息一つなく静かに眠っている母だった。受け入れることができず、泣くばかりの毎日が続いた。しかし、「今を大切に生きる」ということを思い、今は母の分まで一生懸命に生きている。私自身、これから母とたくさんの思い出を作りたかった。旅行、成人式、結婚、初孫…。亡くなる1ヶ月前に「居酒屋に行こう」と母に誘われたので、「もちろんやん、未成年やけどな」と冗談交じりに交わした約束は結局果たせなかった。今でも、ふとした時に母がいなくなつたことを思い出してしまう。このときばかりはいまだにつらい。しかし、現実をしっかり受け入れ、これから先、生きていこうと思う。

この『僕の生きる道』は、「死」という難しいテーマを見事に克服し、素晴らしい作品になっている。不安に感じた時に読み返すのがこの本である。

(奥野雅樹)



『この胸いっぱいの愛を』³(梶尾真治著 小学館文庫)を、私はすすめたい。この本は映画で公開されて話題になった。私は映画は見たことはないが、とても気になっていたので小説を手に取ってみた。少し現実離れをしている話だが、おもしろくてあつという間に読んでしまった。

ストーリーは2006年から20年前の1986年にタイムスリップをしてしまう。タイムスリップをして、20年前に助けられずに死んでしまった人に会って助けるのである。ここでは、鈴谷比呂志と布川輝良と吹原和彦・栄子夫妻と臼井光男のそれぞれの話である。

主人公は鈴谷比呂志で、20年前に死んでしまった和美を助けることになる。和美は10歳以上はなれているのだが、よく家に遊びにきていて比呂志(ヒロ)にバイオリンを教えてくれた人である。和美はとてもバイオリンが上手くプロを目指していた。しかしある日、和美は難病におかされてしまう。脳に複雑な腫れ物ができるチャナという病気である。手足がしびれ震え

だと発作を起こすという。手術をすれば成功率は低くても治る可能性があるのだが、どこかの風土病らしく、病例があまりないのだ。バイオリンもやめてしまい生きることを和美は放棄するが、ヒロは和美にどうにかして手術を受けさせようとする。その手段とは、有名な交響楽団のコンサートの指揮者に頼み込んで、和美を出演させるということであった。ある交響楽団のバイオリニストが和美のことを知っていた。指揮者も承諾をしてくれて、ヒロは和美をコンサートに誘う。そのコンサートの最後に和美がステージに呼ばれて演奏したのである。和美は「もっと上手くなりたい、もっと生きたい!」と思うようになる。そして手術を受け20年後にヒロと再会し、結婚するのである。

布川輝良のタイムスリップとは、何故、母親はレイプされ、自分を生んだのか、母親はどんな人なのか知ろうとするものであった。

吹原夫婦は息子の稔を事故でなくし、息子の死が原因で離婚してしまう。その夫婦が20年前に戻って、息子をどうにか助けようとするのである。

臼井光男は学生の頃、優等生であったが、テストで100点を取れない時は母親に怒られていた。その時むしゃくしゃする気持ちを壇の上に綺麗に咲いている花にあたっていた。罪悪感があり、何度もその家の人に謝りに行こうとしたが勇気がなくそのままだったのである。そんな学生時代にタイムスリップする。

実はこの登場人物達は全員同じ飛行機に乗っていたのだ。その飛行機が墜落し、その瞬間にタイムスリップしてしまったのである。ヒロは20年前の幼き自分に「絶対飛行機には乗るな」と男と男の約束をする。吹原夫婦も息子が死なずにすんだため、息子の墓参りで乗る飛行機には乗らなくなるのである。そのおかげで死なずにすむが、他の登場人物はタイムスリップから戻ると同時に死んでしまう。20年前の心残りを果たして死ぬのだが、なんだか切ない気持ちになつた。

死んでしまう人を助けて未来を変える…そんなことが本当にありえるのか。ありえるのなら、私も死んでしまったおばあちゃんにもう一度会って、助けられなくても心残りの無いように過ごしたい。そんな想いでこの本を読んだ。感動するところもあり、切ない気持ちにもなる話だった。何度も読み返しても飽きない本だと

私は思う。今、できることを悔いのないように精一杯していこうという気持ちになる本である。(石橋亜希)



私が薦めたい一冊は石田衣良という作家の『少年計数機』⁴(文春文庫)という小説だ。この本は前にテレビのドラマでやっていた「池袋ウエストゲートパーク」の続編であり、東京、池袋を舞台として、現在の少年少女達の日常をリアルに描いた作品である。

現在の子供たちは昔とは違い、小学生や中学生でも麻薬に手を出し、強盗などのたくさんの事件を起こしている。その犯罪の低年齢化を石田衣良は実にリアルに描いている。

本の内容は、池袋生まれ、池袋育ちの主人公マコトが家の近くの公園で、数に人一倍敏感な少年ヒロキと出会う所から始まる。出だしの一部を抜粋すると「身長は百四十センチもないチビ。やせているので体重だって三十キロくらいだろう。ほんとうならどこかの小学校で分数の計算でも習っているはずなのに、昼間から円形広場のベンチにひとりで座っている」というシーンだ。私は初めて読んだとき、たったこれだけの文章でも何かひきつけられるものがあり、早く続きを読みたいと思ってしまった。この少年は実はヤクザの息子であり、金目当てで実の兄に誘拐されてしまう。だが、ヒロキの暗号ともいえるヒントを頼りにマコトは、ヤクザやチーマー達ともめながら、救出に向かう。そんな物語である。

この小説がなぜ読む者の気持ちを引きつけるのかと考えた時、たとえ脇役であろうとも、事細かく描かれているのと、実在する街を在りのままに表現しているところだと思う。それにより、この先どうなるのだろうという期待感を読み手に与えるのではないかと感じた。

この本の中では池袋という街は危険で誘惑の多い所であるように書かれている。私は実際に行ってみたのだが、姫路とは違う危ない雰囲気を醸し出していたのは確かだった。このシリーズの小説を読んで東京の街に少し詳しくなったところもある。

この小説は第五シリーズまで出ており、どれも早く続きを読みたいといふものばかりである。池袋のことをあまり知らない人でも読み終われば、多少は詳しくなっているのではと思うほど、面白い小説だと思う。機会があれば読んでもらいたい小説だ。(三野豊)

図書館日誌

[2005年]

4. 4 利用開始
院生・学部生対象図書館ツアー (~4.30)
- 4.12 私立大学図書館協会西地区部会
阪神地区協議会会計監査(梶浦)
- 4.18 第1回図書館運営委員会
- 4.20 私立大学図書館協会第1回ホームページ委員会(福田)
- 5.20 私立大学図書館協会2005年度
第一回西地区部会阪神地区協議会定期総会(長野)
6. 8 平成17年度目録システム地域講習会 (~6.10高坂)
- 6.13 「トライやる・ウイーク」姫路市立広嶺中学校 (~6.17)
- 6.20 第2回図書館運営委員会
- 6.24 私立大学図書館協会
第1回阪神地区相互利用担当者連絡会(西岡)
- 6.28 富士通大学図書館新パッケージ発表会(福田)
7. 6 学生図書委員会
- 7.15 私立大学図書館協会阪神地区協議会第2回運営委員会(長野)
- 7.19 大学図書館近畿イニシアティブ能力開発専門委員会(梶浦)
- 7.22 さぎそう29号発行
- 7.24 臨時開館 (9:00~18:20)
- 7.26 平成17年度兵庫県大学図書館協議会総会(海老原、梶浦)
- 8.11 夏期休館 (~8.18)
- 8.24 私立大学図書館協会東西合同役員会・
第66回総会・研究大会 (海老原)
- 9.12 システム入れ替えのため臨時休館 (~9.17)
- 9.13 私立大学図書館協会第1回阪神地区研究会(高瀬)
- 9.13 大学図書館近畿イニシアティブ能力開発専門委員会(梶浦)
- 9.30 私立大学図書館協会西地区部会研究会(梶浦)
10. 3 第3回図書館運営委員会
- 10.21 兵庫県大学図書館協議会講演会 (福田)
- 11.22 大学図書館近畿イニシアティブ能力開発専門委員会(梶浦)
- 11.28 臨時図書館運営委員会
- 11.30 平成17年度国立情報学研究所
ネットワーク管理担当者研修(福田) (~12.2)
12. 6 私立大学図書館協会
第2回阪神地区相互利用担当者連絡会 (西岡)
- 12.26 冬期休館 (~1.6)

[2006年]

- 1.16 第4回図書館運営委員会
- 1.17 私立大学図書館協会阪神地区第3回運営委員会(長野)
- 1.17 大学図書館近畿イニシアティブ能力開発専門委員会(梶浦)
- 1.21 大学入試センター試験に伴う休館
- 1.20 さぎそう30号発行
- 2.17 第2回私立大学図書館協会阪神地区研究会(高坂)
3. 3 大阪大学附属図書館学術講演会 (福田)
- 3.31 春期休館 (~4.3)

平成18年度附属図書館運営委員

図書館長 家 正治
外国語学部

ドイツ語学科	湯 浅 博 章
英語学科	初 谷 智 子
中国語学科	安 本 實
日本語学科	山 崎 恵
スペイン語学科	白 井 智 子
韓国語学科	金 天 鶴
法学部	金 丸 義 衡
	森 永 真 綱
経済情報学部	鷹 津 芳 樹
	野 上 千 穂
医療保健学部	
理学療法学科	村 田 伸
作業療法学科	大 西 道 生
言語聴覚療法学科	鈴 木 正 浩

子ども保健学科 高橋秀典
臨床工学科 今村伸一郎
法務研究科 藤村知己
事務系職員代表 三村雅英

平成18年度附属図書館学生図書委員

外国語学部

英語学科	1年次生	秀平 唯
中国語学科	2年次生	谷本 裕美
日本語学科	1年次生	武川 麻美
法学部	3年次生	宇都宮 守
経済情報学部	1年次生	石澤 康匡
医療保健学部		
子ども保健学科	1年次生	石井 西奈
	1年次生	内田このみ

姫路獨協大学附属図書館報 さぎそう No.31

編集・発行 姫路獨協大学附属図書館
姫路市上大野7丁目2-1 (〒670-8524)

2006年7月21日発行

ISSN 0915-8189

電話 079-223-6506

Fax 079-223-0928

e-mail library@himeji-du.ac.jp